
‡ 夜宵～戦乱に生きたくのいち～ ‡

たか坊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

壬夜宵／戦乱に生きたくのいち／壬

【Nコード】

N2886D

【作者名】

たか坊

【あらすじ】

西暦2007年東京。歴史好きの達哉が見つけたのは古い本だった。延宝九年。今から300年以上も前に書かれた書物見つけた達哉は好奇心に駆られ、本を読みふける。それは戦国の世、天下統一を目の前にしてこの世を去った織田信長に仕えた一人のくのいちの話だった。この物語は、織田信長を支えた、歴史の表舞台には出てこない影の立役者であった彼女の人生を書いたストーリーである。この話はフィクションです。登場人物や場所は実際とは少し異なります。

第一話：その本の名は・・・

今から約500年前、日本は室町幕府により統治されていた。貴族の時代から武士の時代へと移り変わり、世の中は武士中心の世界へと変わっていた。そして、室町幕府が倒れ、世の中は戦乱の世へと変わっていった。各地の武将が、我こそはと天下統一を目指した時代、戦国時代へと突入した。

織田信長。歴史上の人物。今時小学生でも知っている人物だ。この人物もまた天下統一を目指す武将の一人だった人だ。しかし天下統一寸前にして家来の裏切りによりこの世を去った、哀れな人でもある。大うつけと言われた彼がなぜ天下統一寸前まで行く事ができたのか。それにはある重要な人物の存在があった。この物語はその重要な人物が、戦国の世でどのように生き抜き、そしてどんな事を思い、死んでいったのかを書いたものである。

「父ちゃん。そんなテレビ面白くないって。他のチャンネルに変えてよ」

息子が横で吼えている。そりやまだ小学3年の息子にとっては、歴史の番組など面白くないだろう。しかし歴史愛好家の私にとっては息子にとってのアニメと同様に大切な番組なのだ。

「ほら、お前も見てみる。歴史って面白いんだぞ」

俺は息子を抱き上げテレビを見せた。しかし息子は私の手を振り解

き、二階へ上がってしまった。

「あの子の気持ちもわからなくはないですね」

妻がビールのつまみを持って台所から来た。

「歴史の何がそんなに面白くないんだ。お前もそう思わないか？」

俺の名前は穴戸^{しじど}達哉^{たつや}。41歳。妻と一人息子との3人家族。仕事はサラリーマン。趣味は歴史。歴史好きすぎてテレビの話になるといつも息子と喧嘩のありさま。

「今度の休み、本当にいいんですか？私とあの子と二人だけで」

妻は横に座りビールを注ぎながら聞いてきた。

「ああ、たまには生き抜きでもしてこい。いつも家事ばかりじゃ疲れるだろ。ちよつとゆつくりしてこい」

昨日の夜に、商店街の福引で温泉旅行が当たったのだ。しかし生憎のペアチケット。息子を置いてはいけないので、妻と二人で行かせることにしたのだ。

「なら、ありがたく頂きますよ」

妻はそういつてニツコリ笑った。俺はその笑顔をつまみに一気にビールを飲んだ。

「じゃあ行ってきますから」

妻が不安そうに俺を見る。

「大丈夫大丈夫。これでも若いころは一人暮らしもしてたんだ。安心して行つて来い」

俺は息子の頭を撫でながら言った。

「火は使ったらちゃんとガスの元栓は締めるんだぜ」

息子が生意気にも言ってくる。

「お前に言われたくねえ」

俺は息子に軽くデコピンをした。息子はオデコを押さえながら、妻の後を追いついて出かけていった。

俺は家に帰り着替えをした。せっかくの一人だ。少しブラブラお出かけをしようと思ったからだ。俺は服を着替え、戸締りをして家を出た。東京とはいっても、騒がしくない普通の住宅街だ。すこし歩けば騒がしい都会へと早代わりする、便利と言えば便利な場所だ。俺はブラブラと当ても無く歩いていた。すると遠くの方から賑やかな声がする。近くのグラウンドからだ。草野球の試合でもやっている

のだろうか。どうせ暇だ。俺はグランドの方へ歩いていった。グランドには多くの人が集まっていた。フリーマーケットだ。俺は少しウキウキしていた。こういう場所には掘り出し物があるものだ。俺は店を見て周った。服や玩具、いろいろなものが売っている。すこし歩いていると、俺の目を引く店があった。骨董品が並んでいる。俺はしゃがみ込んで品物を見ていた。店の人は老人だった。どれもこれも素晴らしいものだ。俺は興奮していた。そんな俺を見て思ったのか、

「お前さんはええ趣味をしとるのお。気に入ったのがあったら買っ
ていっておくれよ」

全部欲しいところなのだが、生憎あまりお金を持ってきていなかった
たので、どれか一つだけにすることにした。俺は品物を見ていつて
どれにするか迷っていた。すると俺は一つの商品に惹かれた。それ
は店の老人の座ってる椅子の横にあった本だ。とても古そうなもの
だ。ボロボロで触ると破けそうなくらいだ。

「おじいさん、それください」

俺は本を指差した。しかし店の老人は、

「悪いがこれは売り物じゃないんじゃわ」

そう言った。俺は残念だった。しかしここで諦めるわけにはいかな
い。俺は必死に交渉した。交渉のあげく、なんとタダで譲ってもら
えることになった。行ってみるものだ。本を手にして、そのまま家
に帰った。読むのが待ち切れなかったからだ。

俺は家に着くと自分の書斎へ行き、手袋をつけた。古い本なだけ
に丁寧に扱わなければならないからだ。俺は鞆から本を取り出し机

に置いた。本当に古い本だ。本というよりは冊子に近い。何年前のものだろうか。間違いなく昭和のものではない。明治？いやもしかしたら江戸時代かもしれない。俺は本の裏のページを見て書かれた年代を見た。

「延宝九年 辛酉」

俺は目を疑った。延宝九年といえば西暦1681年。今から300年ほど前のものだ。こんなものがよく今まで残っていたものだ。俺の興奮は絶頂だった。こんな物に出会えるとは思っていなかったからだ。踊る胸を押さえながら俺は本を読むことにした。表紙はボロボロで何を書いてあるかわからない。しかし薄っすらと文字が書いている。

「やよゐ」

そう書かれていた。俺は1ページ目を捲った。

第二話：夜宵

私は死んでしまうのだろうか。いや、死ぬなんてそんな良いものでもない。誰にも気づかれずにただこの世から消えるだけ。我々忍びは、影に生きる者。誰にも気づかれる事は無い。しかし運命という物はあるのだろうか。もしあるとしたら私は運命を憎む。寒い雪降る夜に、木陰で座り込むこれが運命だと言うのだろうか。遠くのほうから馬の足音が聞こえる。武士だろうか。目を開けることすらしんどい。足音が近づいてくる。意識が飛びそうだ。

「なんじゃこやつは」

誰かが私に気づいたのだろうか。しかし声を出すこともできない。

「こんな寒い夜にこのようなところで、可哀想に」

「どうなさますか利家殿？」

声が聞こえる。顔を見る事などできない。

「どうしたのじゃ」

低い渋い声が聞こえた。

「いえ、この者が倒れていたもので。列を乱し申し訳ございません。すぐ出発を」

そういつて馬は去っていった。助けてはくれぬかった。少しは希望を持ったのだが、世はそんなに甘くはないのだろうか。しかし死ぬこ

とは怖くなどない。もう眠気に勝てそうもない。とうとう私は死ぬのか。また遠くから馬の足音が聞こえる。しかし私の意識はそこからはほとんどなかった。ただ暖かい背中の中の温もりだけが伝わっていた。

人の話し声が聞こえる。薄っすら光も見える。天国か・・・それとも地獄か。しばらくすると一人の男が私の元へ来た。

「気がついたかい？」

男は私の額の布を変えてくれた。優しい顔の人だ。私は起き上がるうとしたが、力が入らず男に倒れ掛かってしまった。

「あまり無理をするな。衰弱しておったのだぞ。ゆっくり休めばよい」

男は私を寝かせた。

「ここは？」

私は男に尋ねた。

「ここは尾張の国、アンタが道で倒れていたのを、この利家様が助けてくださったんだよ」

そう言っただけで後ろから男が歩いて来た。男は私の横に座った。どうやら私は助かったらしい。一度は諦めたこの命、これも運命か。

「私が助けたのではない。礼を言うなら信長様に言うのだな。助けに行くことを承諾してくださったのは信長様だ」

信長。尾張の大うつけと呼ばれる人物だ。私も名ぐらいは知っている。

「動けるようになったら、信長様に紹介しよう。その前に今はゆっくりと休むことだな」

私は言葉に甘え、眠ることにした。

悲鳴が聞こえる。目の前で人が死んでいく。そう、私の住んでいた村は焼き払われ、そして私の家族、仲間はどうなったのだろうか。私は逃がされたのだ。戦う仲間を背に、私は逃げた。戦いたかった。しかし父はこれが運命だと私に告げ、燃え盛る村へと走っていった。なぜ私は生きているのだろうか。村の長の娘だから？　なら私は普通の家に生まれたかった。皆と共に戦いたかった。皆は無事だろうか。

鳥の囀り^{たえず}で目が覚めた。おでこの布はまだ冷たい。私は痛む体を起し、立ち上がって部屋から出た。すると縁側に男が立っていた。私を助けてくれたという男だった。

「気がついたか。まだ体が痛むだろう。あまり無理をするな」

男は私を縁側に座らせて外で立っていた。縁側の段差があるのにも関わらず視線が私より高かった。

「・・・助けてくださったこと感謝します」

すると男はクスッと笑い、

「昨日も言ったが、俺に礼を言うなら信長様に礼を言うんだな」

信長。尾張を統一している小主君だ。私を助けた人らしい。

「・・・信長様が私を？・・・あなたではなく？」

私がそう言つと男は頷いた。

「私の名は利家。親しみを込めて犬千代と呼んでくれてかまわん」

私はコクリと頷いた。優しくそんな目をしていた。それでいて屈強な目でもあった。正しくそれは武士の目だ。

「少し経つたら信長様の元に行こう。御礼の一つはしなければなら
ないだろう」

私はまた頷いた。すると犬千代は少し顔色を変えて、

「あの夜どうしてあんな場所にいたんだ。それに肩の刺青……」

肩の刺青。私の村は影隠れの里。代々忍びの一族が住まう村。私はその一族の長の娘。

「肩の黒い烏の刺青。君はまさか、烏丸一族の？」

別にこの人に隠すことでもない。それに命の恩人でもある。

「はい。私は影隠れの里、10代目長の娘です」

犬千代は険しい顔をして、

「君も忍びか。影隠れの……では君が最後の……」

最後？ いったい何のことだろうか。私は聞いてみた。

「最後とはどういう意味ですか？」

犬千代は悲しい顔をして、

「君を見つける前、私達は森に迷い、途方も無く歩いていった。何か焦げ臭い匂いがして、民家が近くにあるのかと匂いの方へ歩いて行くと……酷い有様だった。家は焼かれ、目の前には死体が散乱していた。恐らく山賊か何かの仕業だろう」

私は言葉が無かった。淡い希望を持った自分が不甲斐なかった。自分だけ助かった。仲間を置いて。涙が止まらなかった。堪えられない

かった。忍び足るもの涙は流さぬ。そう父から教わっていた。しかし我慢などできない。拭けど拭けど出てきてしまう。それを見た犬千代は私を自分の胸に抱いてくれた。

「泣きたいときは泣けばよい。涙枯らすまで泣けばよい」

私はずっと泣いていた。どれくらい泣いただろうか。今まで溜まっていたものが噴出した様に泣いた。犬千代はずっと私を抱いていてくれた。

ようやく泣き止んだ私に犬千代は、「着いておいで」と私を信長の元へと連れて行ってくれた。間の前に聳え立つ大きな城。清洲城という名のこの城は、村から出た事がない私にとってはまさに声にならない驚きであった。廊下を歩き、信長のいる間へと入った。装飾で飾られた間の奥に座る男がいた。織田信長だ。屈強でいて、未恐ろしい目をしていた。上半身の着物を肌蹴させてまさにうつけと呼ばれるに相応しい格好だった。

「信長様、この者が信長様にお礼をしたいと言うので参りました」

私は犬千代の真似をしてお辞儀をした。犬千代は目で私に合図をした。

「こ、この度は、お、お命を助けてくだはいまひて、あ、ありがとうございます」

綺麗な言葉にならなかった。めちやくちゃだ。犬千代もクスクスを笑ってる。私は頭を上げ信長の顔を見ると厳しい目で私を睨み付けていた。私は固まってしまった。数秒間その状態が続いたが、横に

座っていた男がその空気に耐え切れず笑い出した。

「ヒヤハハハ。くだはいまひてとは面白い」

すると他の者達も笑い出した。私はもう一度信長の顔を見た。すると信長は笑い、

「ハハハ、そう固くならんでもよい。おい利家、これもお前のしつけか」

そう言われ犬千代は頭をかいていた。私は恥ずかしかった。何処かに隠れたかった。

「うぬの名は？名はなんと云うのじゃ？」

信長が聞いてきた。

「夜宵、夜宵でございます」

肩の力が抜けたのか、普通にしゃべれるようになった。

「夜宵、良い名じゃな。お主、影隠れの出身だそうじゃな」

場の空気が一瞬止まった。村の惨劇をここにいる者達は見たのだからか。

「悲しいか？」

信長が私に聞いてきた。私はこう言い返した。

「悲しくはありません。ただ、村の皆を置き、生きている自分が情けないだけです」

皆一言もしゃべらなかつた。私を哀れだと思つて情けをかけているからか？ 不幸だと思ひ氣を遣つていつのか。

すると信長は私に向かい箸を投げてきた。私はそれを手で掴んだ。驚きの声が周りから聞こえる。

「いい腕じゃ。流石は影隠れの忍びじゃな」

信長そういつて笑みを浮かべた。そして、

「余に仕えよ」

辺りがざわついた。

「お主はあの晩に死んでおつた。それを余が助けた。お主はもう昔の事を悔いる事はない。影隠れの夜宵はもうおらぬ。これからはこの信長の忍びとしての夜宵となり生きよ」

私は驚いていた。しかし心の中で何かホツとしていた。犬千代を見ると私に向かつて微笑んでいた。

「精一杯奉公いたします」

こうして私は信長様に仕える事となつた。

第三話：サル勝機

私は犬千代と歩いていた。皆は犬千代の事を利家や利家殿と呼ぶ。織田家直参である犬千代は、容姿端麗で背も高い。そんな犬千代には正室の妻がいた。芳春院、皆はまつ殿と呼んでいる人だ。美しく、そして強いお方だ。学問や武芸にまで広く関心を持たれた方だ。

私が信長様に仕えて丁度半年が過ぎた。ここでの暮らしにも慣れ、知り合いも多くなった。

「おゝ、利家殿に夜宵ちゃんでないか」

前から声をかけて来たのは、初めて信長様と面会した際に、堪えきれずに最初に笑ったお方だ。皆からはサルサルと呼ばれている人だ。

「サル、お主も早く妻を貰ってはどうか？　いつまでも一人では寂しいであろう」

犬千代がからかう。

「そりゃ、利家殿にはまつ殿がおるからいいが、ワシはいつまで経っても一人身じゃ」

サル殿はそいうと私の方を見た。

「誰もおらんかったら夜宵ちゃんに嫁いでもらおうかの」

私は顔を赤らめた。

「人間に嫁ぎたいそうだ」

犬千代はサル殿にそう言った。

「そんな事はない。サル殿は面白いお方だし、知恵も持ってらっしゃる」

「サル知恵だけだな」

また犬千代がからかった。

「ひどいのお利家殿は。夜宵ちゃんの方がよっぽど素直じゃ」

サル殿はそう言って笑いながら去って行った。犬千代もずっと笑っていた。私はサル殿の笑顔が好きだ。あの人の笑顔は人を幸せにする。

私は犬千代と共に家に戻った。まつ殿の夕飯が待ち遠しい。

「まつ、今帰ったぞ」

いい香りがしている。山椒だろうか。

「お帰りなさいませ犬千代様、夜宵ちゃん」

まつ殿は私と同じ歳。12歳で犬千代の元に嫁いだらしい。私と同じとは思えぬくらいの落ち着いた人だ。武士の妻としての鏡的な人であり、また、女としての鏡的存在の人だ。

「腹が減った。まつの美味しい飯を待っておったのだぞ」

犬千代はまつ殿が作る飯が一番好きだ。私も無論まつ殿が作るご飯

は格別においしいと思う。

「帰ってたんですか利家殿」

佐乃助が部屋から出てきた。長門佐乃助。古くから前田家に仕える武士だ。

「夜宵、退かぬか。利家殿の横は俺の席だ」

佐乃助が怒鳴る。

「犬千代の横は私が座る」

私も負けずに言い返した。

「犬千代って！！なんとも言ってるだろう！利家様だ！」

言われなくとも何回も聞いている。

「良いのだ佐乃助。夜宵は私の家来ではない。信長様の家来だ。本当は私とは対等な立場なのだぞ」

犬千代が言い添えてくれた。

「本当でしたら佐乃助の方が夜宵ちゃんのこと、夜宵殿って呼ばなければならぬかもしれないわね」

まつ殿も味方をしてくれる。

「まつ殿まで・・・仕方ない。今日は譲りますよ、夜・宵・殿」

私は佐乃助に向かって舌を出した。犬千代もまつ殿も笑っている。ここはすごく心地がいい。こんな日が続いてると、村のことを忘れてしまいそうだ。信長様は忘れろとおっしゃったが、忘れることなどできぬ。半年経った今でさえ、まだ覚えている。

「そういえば、利家殿は明日から駿河に潜入でしたよね？」

そう、犬千代は明日から駿河への潜入する。今川義元。海道一の弓取りと称される、駿河の大名だ。遠江、三河、そして尾張の一部にまで勢力を伸ばしている。現時点で最も天下に近い男とされている。義元自身も優れた内政手腕、それに文武両道の人だが、何より松平元康の力も影響しているだろう。

「大丈夫なのか？」

私は少し心配だった。無事で帰って来てくれるのだろうか？

「心配するな夜宵。私は無事で帰ってくる」

「そうよ、利家殿はこう見えても昔は、槍の又佐衛門って呼ばれた荒れくれ者だったんだ」

今の犬千代からはあまり想像はつかない。確かに武芸の腕は素晴らしい。しかし荒れくれ者だというのは意外だ。

「別に心配などしておらぬ！！ただ他の者の足手まといにならないかというのが心配だったのだ！」

どうも私は素直になれぬ。本音とは違う事を言ってしまう。しかし

犬千代は微笑み。

「心配しなくても、足手まといにも、死ぬこともないさ」

そういつて私の頭を撫でた。まつ殿も笑ってらっしゃる。本当にここは居心地がいい。

朝早く犬千代は出て行った。眠い目を擦りながらも犬千代の背中を見届けた。無事で帰ってくるのを願う限りである。

私は毎朝修行をしている。忍び足る者毎日の修行は欠かせぬ。幼い頃から叩き込まれた修行の成果か、常人離れた運動能力を持っている。瞬発力や俊敏さ。視野に適用能力。すべてにおいて昔から叩き込まれていた。しかし実戦はまだ無い。人を殺めたこともない。私は、信長様に仕えたといってもそれほどのはしていなかった。ただ世の中のこと調べると、そう信長殿は仰った。それから私は何度も城下に下り、いろいろな情報を集めていた。潜入もした。しかし未だに人を殺めたことはない。しかし戦となれば私も人を殺めなければならなくなる。

「夜宵ちゃんじゃねえか」

サル殿だ。

「まゝた情報集めに行つとたんか」

餅を食べながら歩いてきた。

「サル殿。ええ、私にはこれくらいしかすることがないので」

サル殿は石に腰掛けた。

「お主の目から見て、今後どうなると思う」

サル殿が爪楊枝を加えながら聞いてきた。

「駿河の今川義元。恐らく近いうちにこの尾張にも攻め込んでくるではないでしょうか」

サル殿は背伸びをして、

「やはりそう見るか。恐らくそれは正しいじやろうな。相手は最も天下に近い男と言われている奴じゃ。織田家とてひとたまりもないじやろうて」

私もそう思っていた。しかしサル殿の次の一言に驚いた。

「まあ、そうとも限らぬかもしれんがのお」

そう言つてサル殿は笑いながら去つていった。人並みはずれた知恵を持つてらっしゃるサル殿がそう言うとは驚いた。圧倒的な力の差は歴然。何か秘策でもあるのだろうか。私もサル殿の言つた勝機とやらを考えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2886d/>

‡夜宵～戦乱に生きたくのいち～‡

2010年10月16日05時21分発行